

ピシディヤのアンティオキア伝道

シリアのアンティオキアにある教会から送られて第1回伝道旅行に出発したパウロとバルナバはまずキプロス島に渡った。そこでローマの総督セルギウス・パウロスの回心という大きな成果を得た後、パフォスを船出して小アジアのパンフィリア州の首府ペリゲに向かった。（そこでマルコが一行から離脱するというハプニングが起きたが、それについては第15章で学ぶ）。

ふたりはペリゲからさらに進んで、ピシディヤのアンティオキアに向けて旅を続けた。この町は小アジアの標高1100メートルの中央高地に位置し、ローマのガラテヤ州の首都であった。ケストラス溪谷を通過して高地へ登る約200キロのけわしい山道は、途中、山賊が出没する難所だったと言われ、きわめて危険で困難な旅だったと思われる。パウロは後になって、第2コリント書で伝道旅行中に遭ったいろいろな災難に言及しているが、その中の「盗賊の難」（11：26）はそこで起った出来事であったかもしれない。

福音は様々な危険を乗り越えて人々に伝えられていく。これが過去二千年の世界宣教の歴史である。福音が今日の私たちにまで伝えられてくるまでには、どんなに多くの犠牲が払われてきたかということに感謝をもって思い起こすことは大切なことである。

アンティオキアには多くのユダヤ人が住んでいた。パウロとバルナバは、安息日になるとまずユダヤ人の会堂に出席しその機会を利用して福音説教を開始した。発言の機会が与えられて、椅子から立ち上がり手を振りながら語るパウロの熱烈な説教に、人々は熱心に耳を傾け、信じる者が、特に異邦人の間に、次々に起こされていった。ここに記録されている説教は使徒言行録に記されている使徒パウロの説教の最初のものであり、たとい実際に行なわれた説教のルカによる概略の記録であったとしても、使徒パウロの説教者としての思想と方法を示しているという点で大変意義深い。

彼はまず、イスラエル民族の歴史を語る。父祖たちに与えられたメシアによる世界救済の約束が、出エジプトから、荒れ野の40年、激動の士師時代を経て、ダビデにまで受け継がれ、さらに明確にダビデに約束されたこと、そしてその約束が、ダビデの子孫としての救い主イエスの来臨において実現したことを彼は強調する。イエス・キリストの到来は、旧約の歴史と預言の成就以外の何ものでもなかった（16～25節）。

しかし伝統に凝り固まったエルサレムの宗教指導者たちはイエスをキリストと認めることを拒絶し、ローマの総督ピラトの手に託して彼を十字架につけて殺した。しかし、そこには計り知ることのできない神のみ旨があった。すなわちイエスの死は人間の罪の贖いのためのメシア（救い主）としての死であったこと、神は彼を死よりよみがえらせることによって、イエスがメシアであることを力強く証しされた（26～37節）。

そして最後に、パウロは結論としてこう語る、「だから、兄弟たちよ、この事を承知しておくがよい。すなわち、このイエスによる罪のゆるしの福音が、今やあなたがたに伝えられている。そして、モーセの律法では義とされることができなかったすべての事についても、信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである」（38、39節／口語訳）。人が神の前に義とされるのは、ただイエス・キリストを信じる信仰によってのみであるという福音の真髄がここに語られている。